

<瀬戸学区における事業説明会の開催状況まとめ>

1 開催概要

- (1) 開催日時 2006年2月28日(火) 19:00~22:00
- (2) 開催場所 瀬戸小学校 体育館
- (3) 参加者数 56名(19:30時点)
- (4) 行政出席数 国-5名(調査設計第二課, 用地課), 県-5名(福山幹線道路建設事業所), 市-3名(幹線道路推進室)
- (5) マスコミ等 6社

2 開催概況

19:00 開会

19:01 開会あいさつ, 配布資料確認, 出席者紹介, 案内方法説明, 進行次第説明

19:10 配布資料説明-前回の主な質疑応答, 浮遊粒子状物質等の排出量, 環境影響照査結果

19:55 質疑応答開始

21:00 質疑応答時間の延長

○ 進行の発言要旨

閉会予定の9時となりましたが, ご質問が残っているようですので, 40分程度質疑応答時間を延長させていただきます。

21:30 質疑応答の終了予告

○ 進行の発言要旨

閉会時間を延長して対応して参りましたが, 施設の借用時間は10時までとなっております, また, 参加者皆様の体調面もございますので, あと1~2点のご質問をお受けして, 質疑応答は終了とさせていただきます。

21:50 質疑応答終了

○ 進行の発言要旨

予定時刻を延長して対応させていただきましたが, 数名のご質問が残っております。

このため, 今後は, 質問が残っている方々には個別に対応させていただくことをお約束し, 瀬戸学区における事業説明会は一定の役割を果たしたことから, 本日をもって終了とさせていただきます。

個別対応を希望される方には, 事業者より電話連絡のうえ, 日程調整等を行い個別に対応させていただきますので, ご帰宅の際には, 受付に用意している用紙にお名前と電話番号をご記入ください。

なお, 事業に関するご質問やご意見には, 配付資料に記載の関係機関までご連絡頂ければ, その都度, 対応させて頂いておりますので, 業務時間内であれば何時でもお問い合わせください。

21:53 事業説明会終了のあいさつ

○ 国土交通省福山河川国道事務所調査設計第二課長の発言要旨

前回の課題事項のご質問や, また, 今回新たな質問に対しても回答させていただきました。これまでも瀬戸学区内では平成13年度から延べ11回開催してきました。

こうした中, 質問内容等からも事業概要については, 一定のご理解をされたものと考え, 今後は事業に対するご質問等について, 専門的な範疇の質問に対して, 迅速かつ丁寧な対応が可能である個別対応にて, 説明をさせていただきます。

そして, ご質問内容や回答については, 公開できるものは, ホームページで公開し, 周知していきます。

こうしたことから, 事業説明会は, 一定の役割を果たしたと判断し, 事業説明会を終了させていただきます。

21:55 事業説明会終了

○ 進行の発言要旨

本日をもって, 瀬戸学区における事業説明会を終了します。

3 主な質疑応答

No	質問・意見等の内容	回答・見解の要旨
1	事業の流れと事業進捗が異なっており、開会あいさつの中で「用地事務に入っている」とのことであったが、用地事務の経過について説明を求める。	事業説明・設計協議・用地説明・工事説明といった事業の各段階において、関係者の方と協議・調整する場を持ちながら事業を進めている。この結果、現在、地頭分の二番組町内会と長和地区について、用地調査をしているということで、用地事務に入っていると発言したものである。
2	熊野学区鳴地区における不在置手紙について、返事がなければ了解したものであるという文章があるが、一方的ではないのか。	熊野町鳴地区における不在置手紙では、「連絡がない場合はご理解を頂いたものと判断する」という文言を入れているが、詳細設計内容についての疑問点や、質問の有無を伺ったものであり、事業実施に賛同するという意味ではない。
3	前回の事業説明会では山北地区のSPMの観測地は超過している所が多かったが、今回の照査結果では環境基準を満足している。これほど数値が変わった原因をはっきりさせて欲しい。	H12年に行った環境影響評価書と今回の照査結果の違いは前提条件が異なっており、変更点としては、最新であるH42年予測交通量を用いたこと、地元協議の中で盛土から高架構造に変更したこと、四季観測である現地調査のバックグラウンド濃度を使用していること、騒音の予測モデルの更新である。
4	バックグラウンド濃度について、環境影響評価では年間通して行うものと聞いているが、四季観測のデータでは短すぎるのではないのか。	H10年の建設省令で、二酸化窒素・浮遊粒子状物質における標準的な予測手法が定められており、四季の現地観測期間については、全国的に確立された手法である。また、風向・風速については、四季現地観測結果で得られたデータを松永にある福山特別地域観測所の通年の気象データを用いて、概ね1年間の値になるように換算したものである。
No	質問・意見等の内容	回答・見解の要旨
5	熊野学区鳴地区の不在置手紙について、「設計協議を了解したとみなす」とあるが、国の方でも住民の合意形成を図るものと言っているが、その見解を教えて貰いたい。	設計協議が終了とか了解という言葉に言われているが、不在置手紙では、「県道熊野瀬戸線の詳細設計についてご理解をいただいたものと判断させていただきます」とあり、設計協議がという言葉は一切使っていない。詳細設計についてのご質問とか疑問がなかったと判断するとの意味である。
6	道路問題に関しては、環境・必要性・利便性・財政・立ち退き等の問題を、事業説明会で説明し、説明責任を十分に果たしてから設計協議へ移行すべきであるが、その見解を教えて貰いたい。	事業説明・設計協議・用地説明・工事説明といった事業の各段階において、各地区の関係者の方と協議を行い、事業を進めている。
7	福山道路が笠岡バイパスまでに繋がる目途はあるのか。	笠岡までの16.5kmで都市計画決定を行い、現在、長和ICから赤坂ICまで区間は早期整備の必要性からH13年度に3.3kmを事業化し、笠岡西ICから長和IC間については、関係機関と調整しながら効果の早期発現が得られる区間から、順次事業化し整備することとしている。
8	長和ICから赤坂ICまで区間の整備時期はいつか。	長和地区・地頭分地区の一部で用地調査中、山北地区で詳細設計中であり、今後、設計協議・用地事務に入り、長和ICから赤坂ICまでの区間について、平成20年代前半の暫定2車線供用を予定している。
9	16.5kmの中で、立ち退き軒数が何軒あるのか把握しているのか。分からなければ、回答の必要はない。	本日は、資料を用意していないため、即答できない。(補償対象住居 約550戸)
10	H42年予測交通量を使用しているが、供用開始時期はH20年代だと言っているのに、H42年にした理由を教えて貰いたい。	予測交通量というのは、そのときの現況交通量を基に予測するもので、H22予測交通量ではH22年の道路交通センサスを基に推計しており、H42年予測交通量はH11年の道路交通センサスを基にして推計したものである。今回の照査では最新のH42年予測交通量を用いている。
11	配布資料P13-3-(1)-①の回答・見解の要旨について、「環境影響評価書では供用開始後には現地調査を実施」とあるが、道路を造る前に環境基準を守る義務・責任があるのではないのか。	環境影響評価書に記載されているとおりである。環境影響評価は予測であり、自動車を走行させた後の実測により、環境基準を超過する場合は速やかに保全措置を講ずるものである。
12	道路が完成した時の環境予測はどのようになっているのか。	環境影響を予測する際は予測交通量を用いることになる。前回の事業説明会時点の予測交通量はH22であるが、今回の照査は全国的に用いられているH42予測交通量を用いている。現段階ではH42年予測交通量を用いるのが適切となる。
13	バックグラウンドについて、環境影響評価準備書の段階から前回まで松永のデータを使っていたと説明してきたが、今回は現在の瀬戸町のデータを使用している。今まで松永データを使用していた理由、及びその責任の所在をはっきりして貰いたい。	今回は四季観測の現地調査による照査結果を示しているものであり、責任の所在を問われるものではない。福山の環境でH8からH15間のSPMの状況は、横ばいか若干微減傾向であり、大気環境が徐々に良くなっていることが分かる。
14	環境影響評価書では静穏率が高いこと、複雑な場所での予測手法は確立されていないと国会答弁されていたことから、瀬戸町のような複雑な地形でプルーム・パフ式を用いた根拠等を教えて貰いたい。	プルーム・パフ式は建設省令で定められた標準的な手法であり、地形条件も考慮した予測ができ、使用実績も豊富である。拡散幅に関する係数などにより地域特性を考慮した予測が出来る。
15	SPMに関して、JCT・ICでは加減速のときの係数が確立されていないと聞いているが、その見解はどうか。	大気質については、縦断勾配に対して排出係数を補正したものをを用いている。
16	SPMに関して、プルーム・パフ式以外の地形を考慮した3次元流体モデルなどを使用すべきではないのか。	プルーム・パフ式は建設省令で定められた標準的な手法であり、地形条件も考慮したことから3次元流体モデルを採用するつもりはない。
17	瀬戸で年間何回逆転層が発生しているか、風向・風量を調べたのか。	環境影響予測は逆転層の影響も考慮された予測式を用いていることから調査するつもりはない。
18	2004年7月の説明会の時、大気の現地調査を行っていたのではないのか。何故、その時点で実施していたことを公表しなかったのか。	現地調査に関しては、過去の説明会等で途中経過を説明している。また、現地調査を実施した地区では結果を報告している。
19	道路整備に関する懇談会で各市町の方々と話している会議があるが、渋滞という言葉は出ていない。備後地域の産業活性化のため、また、港湾の国際コンテナターミナルの活性化のために必要不可欠であると書いてあるが、その見解を教えて貰いたい。	事務所のHPには、道路整備の懇談会の中で、要点をまとめたものを載せている。地域の発展には、道路整備が必要であるという大きな視点が述べられたものを掲載している。渋滞に関しては、福山市には主要渋滞ポイントがあり、渋滞緩和の効果があることを冒頭でも説明している。
20	大気現地調査を3年間も放置し、現時点で公表した理由はなにか。	現地調査結果は過去の説明会や設計協議の場で公表している。また、経過については、H15年に最新の予測交通量が発表されてから、現地調査結果等を基に1年かけて照査したもので、関係機関との調整にも時間を要した。
21	バックグラウンド濃度について、H8の松永データと四季観測データと比較して、半減した理由はなにか。	照査に使用したバックグラウンド濃度は計画路線に近い現地データを使用しており、H8松永データと比べ結果的に半減したものになっている。
22	今回の照査結果について、予測交通量などの具体的なバックデータを示して貰いたい。	照査の条件となる予測交通量等は、配付資料に記載している。

23	事業説明会以外での公表は、事業説明会を軽視しているのではないのか。	調査データについては、一人の方に渡した時点で公表と考えている。
24	照査ではなく、環境影響評価をやり直すべきではないのか。	本日は、H12年に環境影響評価書が出た後、新たな条件に則して環境影響の照査を行なった結果を報告しており、環境影響評価のやり直しは、考えていない。
25	ばいじん排出量が大きく減少したことと、バックグラウンド濃度が半減したことは関係あるのか。	ばいじんの排出量が減少していることは、SPMの改善には繋がると思えるが、今回のバックグラウンドが減少したこととの因果関係は判明しない。
26	環境影響評価と照査の違いは何か。	環境影響評価は環境影響評価法に従って行ったもので、照査は行政が変更点等を踏まえて任意に行ったものである。
27	H42予測交通量手法のどのような要素が設定されているのか。具体的な数値で説明をお願いします。	人口推計では一定の時期を境に減少するが、高齢者・女性ドライバーの増加等による免許保有率の増加・経済状況・人口の動向等を考慮して推計を行っている。 免許保有率においては、2030年で男性が75.9%、女性が69.9%である。
28	バックグラウンドの観測地点はどのように設定しているのか。2号やBPの近傍を測定しているがそのデータを使用しない理由はなにか。	バックグラウンドの設定に用いる調査箇所は、計算上で自動車の影響を反映する関連路線から直接影響がないところが選定基準であり、予測上で影響がないとされる200m以上離れた箇所を設定することが原則となるほか、実際に測定する場合には、一定期間の測定車駐車が可能な点や、電源があることなどの条件があり、地元の方と相談して場所を決定している。

※ 回答・見解欄の（ ）は後日、補足分。